

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 24 日現在

機関番号：32644

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25780522

研究課題名(和文)オーラル・ヒストリー(聞き書き)を用いた教育実践に関する国際比較研究

研究課題名(英文)A comparative study of United States and Japanese oral history education

研究代表者

藤井 大亮(Fujii, Daisuke)

東海大学・課程資格教育センター・講師

研究者番号：60638807

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、オーラル・ヒストリー(聞き書き)を用いた国内外の教育実践について横断的に調査し、それぞれの教育実践の共通性と特殊性を国際比較によって明らかにした。具体的には、アメリカ合衆国ジョージア州の公立学校レイバン・カウンティ高校およびNPO法人Foxfire Fund, Inc.によって取り組まれているフォックスファイヤープロジェクト、NPO法人共存の森ネットワークが主催する「聞き書き甲子園」、筑波大学附属坂戸高等学校の科目「環境調査」で行われている聞き書きの授業を対象に、三者の影響関係や同異を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In this study, similarities and characteristics among three oral history projects: (1)the Foxfire Project, well known oral history project continuously conducted from 1966 to the present in rural Georgia, U.S.A., (2)Kikigaki Koushien, inspired by Foxfire and carried out with the support of Kyouzon No Mori, a non-profit organization,(3) Class on Kikigaki at Tsukuba University Senior High School in Sakado, Saitama Prefecture, are compared and analyzed from international perspective.

研究分野：社会科教育学

キーワード：オーラルヒストリー 聞き書き アメリカ合衆国

1. 研究開始当初の背景

オーラル・ヒストリーとは、「テクノロジーの進歩によって発達した録音機器を用いて、人々にその経験を聞き、録音して、書き起こした史料を基に歴史を描いていく手法」(酒井順子『市民のオーラル・ヒストリー』かわさき市民アカデミー出版部,2008,p.26)である。オーラル・ヒストリーは、日本では「聞き書き」とも呼ばれ、学校教育だけでなくNPOが主催する市民講座や研修会などで独自の実践が行われている。

筆者は、このオーラル・ヒストリーを歴史学習に導入することで、既存の歴史学習の問題点を改善し、わが国における歴史学習の新たな方向性を探求しようとする研究を行ってきた。具体的には、アカデミズムや地域のコミュニティで組織的、継続的にオーラル・ヒストリーの研究が続けられ、さらには学校教育にも適用されて大きな成果をあげてきたアメリカ合衆国(以下、米国と略記する)に注目し、研究を進めてきた。とりわけ、学校教育における代表的なオーラル・ヒストリー・プロジェクトとされ、歴史や知名度、成果、影響力といった点で他を圧するジョージア州のフォックスファイヤー・プロジェクト(The Foxfire project)を研究事例とし、文献研究に加えて現地での研究調査を行ってきた。このプロジェクトの成果として高校生が執筆した雑誌(The Foxfire Magazine)は世界中の読者に読まれており、フォックスファイヤーの影響を受けて成立したプロジェクトは、米国内外に200以上存在したとされる。

日本では、フォックスファイヤー・プロジェクトから示唆を得て、2012年より「聞き書き甲子園~Foxfire in Japan~」が始まった。この活動の趣旨は、日本全国から選ばれた高校生(毎年100名)が、森・川・海で働く「名手・名人」を訪ね、対一の対話をとおして、知恵や技術、ものの考え方や生き方を「聞き書き」し、その成果を世の中に伝えていくというものである。

この「聞き書き甲子園」は、NPOが主催する活動であるが、日本国内の学校教育にも影響を与えている。実際、「聞き書き甲子園」に高校生を送り込んでいた高校教員が、自身の授業のなかで聞き書きのプロジェクトを始めるといった事例がでてきている。例えば、筑波大学附属坂戸高等学校の「環境調査」の授業である。このように、オーラル・ヒストリー(聞き書き)は、国内外で、さまざまな学校・機関で広まりつつあるが、他方で、そうした諸実践の全貌はこれまで捉えられておらず、とりわけ海外の主要なプロジェクトと比較した際の、日本におけるオーラル・ヒストリー(聞き書き)を用いた教育実践の独自性が明らかにされてこなかった。

2. 研究の目的

本研究は、オーラル・ヒストリー(聞き書

き)を用いた国内外の教育実践について横断的に調査し、それぞれの教育実践の共通性や特殊性を国際比較によって明らかにすることを目的とした。

具体的には、米国ジョージア州の公立学校レイバン・カウンティ高校およびNPO法人Foxfire Fund, Inc.が行っているフォックスファイヤー・プロジェクト、NPO法人共存の森ネットワークが行っている「聞き書き甲子園」、筑波大学附属坂戸高校の科目「環境調査」における聞き書きの授業、という3つの学校・組織に焦点をあて、それぞれの教育実践について、とくにオーラル・ヒストリー(聞き書き)の目標、手法、成果に着目して比較研究した。

また、調査・研究の過程で、研究代表者(筆者)が主体となって、オーラル・ヒストリー(聞き書き)を用いた教育を推進している当事者間のネットワーク化と相互交流を促進し、オーラル・ヒストリー(聞き書き)を用いた教育実践の相互評価が可能な研究体制の構築を目指した。

3. 研究の方法

上記の研究目的を達成するため、本研究では、米国ジョージア州の公立学校レイバン・カウンティ高校およびNPO法人Foxfire Fund, Inc.が行っているフォックスファイヤー・プロジェクト、NPO法人共存の森ネットワークが行っている「聞き書き甲子園」、筑波大学附属坂戸高校の科目「環境調査」における聞き書きの授業、という3つの学校・組織に焦点をあて、それぞれのオーラル・ヒストリー(聞き書き)を用いた教育実践を対象に、文献研究と現地調査(インタビュー調査、参与観察)を実施した。

オーラル・ヒストリー(聞き書き)を用いた教育実践について研究するために用いた具体的な方法は、次の3つである。

第1に、文献資料を収集し、分析することである。具体的には、オーラル・ヒストリー(聞き書き)の成果として公刊された書物(『聞き書き作品集』など)および関係資料を収集し、分析した。その際には、オーラル・ヒストリー(聞き書き)を用いた各実践の目標、方法、成果に着目し、各実践の同異を明らかにするという手法を用いた。

第2に、そうして得られた基礎的な研究成果に基づきながら、当事者へのインタビュー調査を行い、情報交換・提供および共同研究体制の構築をはかった。また、参与観察(学校の場合は授業見学)を行い、文献研究によって得られた知見が妥当であるかを検証した。

第3に、そうして得られた研究成果について、国内外の教育実践者(高校教員、NPOのスタッフ)にフィードバックを行い、議論をとおして知見の妥当性を高めた。また、海外の研究者の意見も伺い、実践者と研究者の見解をふまえた、より総合的で妥当性の高い

知見を研究成果として提出することを試みた。

4. 研究成果

フォックスファイヤー・プロジェクトについては、次の調査と研究を行った。第1に、プロジェクトの成果として高校生が執筆した雑誌(The Foxfire Magazine 約200冊、1000本の記事)、およびその選集(The Foxfire Book シリーズ)を収集し、その内容を分析した。

第2に、米国ジョージア州のレイバン・カウンティ高校を訪問し、授業観察を行い、雑誌が作られる過程で、どのような教育活動が行われているかを明らかにした。また、担当教員へのインタビューを実施し、指導上の工夫や課題について調査した。

第3に、NPO法人Foxfire Fund, Inc.を訪問し、関係者へのインタビューによって、学校教育での活動を、具体的にどのように支援しているかを明らかにした。

第4に、フォックスファイヤー・プロジェクトの方法を教員に修得させるための研修を行っているピード蒙特大学を訪問し、コーディネーターを務めているヒルトン・スミス教授から日本と米国のオーラル・ヒストリー(聞き書き)実践の同異について意見聴取を行った。

「聞き書き甲子園」については、次の調査と研究を行った。第1に『「聞き書き甲子園」作品集』を入手して分析し、日本のオーラル・ヒストリー(聞き書き)実践についての仮説を得た。

そのうえで、第2に、「聞き書き甲子園」を主催するNPO法人共存の森ネットワークを訪問して担当者へのインタビューを実施し、指導上の工夫や課題について明らかにした。

第3に、「聞き書き甲子園」で聞き書きの手法について高校生に指導している作家の塩野米松氏にインタビューを行い、日本のオーラル・ヒストリー(聞き書き)の独自性について、意見聴取を行った。

第4に、毎年8月に行われている高校生を対象とした「聞き書き甲子園」の研修会に参加し、参与観察と関係者へのインタビューを実施した。また、3月に行われる「聞き書き甲子園」シンポジウムにも参加した。

共存の森ネットワークは、塩野氏から米国のフォックスファイヤー・プロジェクトの情報を得て「聞き書き甲子園」を始めたということであるが、これまで米国のNPO法人Foxfire Fund, Inc.との直接的な交流は実現しておらず、米国の同プロジェクトについての詳しい情報は有していなかった。そこで、筆者が共存の森ネットワークに米国のフォックスファイヤー・プロジェクトについての情報提供を行い、研究成果を還元するとともに、米国のオーラル・ヒストリー(聞き書き)実践について、日本の取り組みと比べて何が

異なるか、意見交換を行った。

「環境調査」における聞き書き授業については、次の調査と研究を行った。筑波大学附属坂戸高校では、農業科の教諭が共存の森ネットワークの協力を得ながら、「環境調査」という科目のなかで、聞き書きの授業を行っていた。坂戸高校の生徒は、これまで埼玉県小川町などで聞き書きを用いた調査を行ってきた。

本研究では、「環境調査」について、第1に授業観察を行い、オーラル・ヒストリー(聞き書き)の成果としてのレポートが作成されるまでの過程で、どのような教育活動が行われているかを明らかにした。

第2に、担当教諭へのインタビューを実施し、指導上の工夫や課題について明らかにした。

第3に、米国のフォックスファイヤーについての情報提供を行い、研究成果を還元するとともに、米国のオーラル・ヒストリー(聞き書き)と比べたときの、日本のオーラル・ヒストリー(聞き書き)の独自性について、教育実践者の立場からの意見を伺った。

上記の現地調査および文献研究の結果を総合し、3つのオーラル・ヒストリー(聞き書き)を用いた教育実践の影響関係や同異を明らかにした。すなわち、「聞き書き甲子園」は、フォックスファイヤー・プロジェクトの影響を受けて成立していた。しかし、両者はオーラル・ヒストリー(聞き書き)の対象と方法において、相違点が見られた。

「環境調査」は、「聞き書き甲子園」に影響を受け、その内容を参考にしていた。実際、オーラル・ヒストリー(聞き書き)の対象と方法については、フォックスファイヤー・プロジェクトよりも、「聞き書き甲子園」との共通性が多かった。

フォックスファイヤー・プロジェクトと「環境調査」は、グループワークを多用していること、教師がファシリテーターとして学習者を手厚くサポートしていることなど、教育方法に共通点が見られた。その一方で、「聞き書き甲子園」と「環境調査」はいずれも、フォックスファイヤー・プロジェクトの一番の特徴でもあり、精神でもある「学習者の選択」(Learner choice)という原理を体現していないことが明らかになった。

以上のように、各々のオーラル・ヒストリー(聞き書き)を用いた教育実践を研究者の立場から整理し分析することで、実践の当事者からは見出しにくい、それぞれの実践の特殊性や共通性、優れた点や課題を明らかにできたと考える。また、そうして得られた知見を、今度は実践者にフィードバックし、相互に協働して検討することで、国内の教育実践者(高校教員、NPO関係者)および研究者(筆者)、そして海外の教育実践者(高校教員、NPO関係者)および研究者の意見をふまえた、より総合的で妥当性の高い知見が得られ、国際的な研究交流を促進することがで

きた。

実際、2017年3月20日には「聞き書き甲子園」の15周年記念シンポジウムが東京大学弥生キャンパスで開催され、そのなかで「15周年記念講演：アメリカ Foxfire の活動とその意義」と題した講演を、フォックスファイヤー・プロジェクトの関係者（ピードモント大学のヒルトン・スミス教授ら）が来日して行った。このように、フォックスファイヤー・プロジェクトの関係者と「聞き書き甲子園」の関係者の交流を促進することができた点も本研究の成果として挙げられる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計0件）

〔学会発表〕（計1件）

藤井大亮：「国内外のオーラル・ヒストリー（聞き書き）を用いた教育実践に関する研究」筑波大学第7回人間系コロキウム（筑波大学）2013.4.24

〔図書〕（計0件）

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤井 大亮 (FUJII DAISUKE)
東海大学・課程資格教育センター・講師
研究者番号：60638807

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()